

乃木希典における文学

——日露戦争および漢詩というジャンル——

一、日露戦争と漢詩

乃木希典は、西郷南洲、副島蒼海、大久保甲東、伊藤春畝など、明治の多くの政治家や軍人と同様、石樵と号して漢詩を作った。漢詩は彼らの大切な教養の一つであった。乃木は青年時、長州豊浦において、結城香涯に漢詩文を学んだ。しかし作詩は、乃木にとって、単なる教養である以上に、特に思い入れのあった営為のようであり、作られた漢詩もまた、乃木という人物の評価の言説と共に、特別の意味合いをまとうて、世に喧伝されることとなった。後に触れる「乃木三絶」と呼ばれる三つの詩などがその代表的なものである。

乃木は嘉永二年すなわち一八四九年の生まれであり、例えば文政生まれの西郷や副島、大久保らからは約二〇年ほど年少で、西園寺陶庵と同年である。また夏目漱石よりも約二〇年ほど年長の世代で

真 銅 正 宏

ある。漢詩人である鷲津毅堂を外祖父に、永井禾原を父に、阪本三橋を叔父にもつ永井荷風はさらに下で、乃木からちょうど三〇歳年少の世代である。

おそらくこれらの世代間約五〇年の振り幅のなかで、明治期の漢詩文の意味合いは決定的に変化したものと思われる。ちなみに彼らの日露戦争開戦時（明治三七年）の数え年は、副島（文政一一年生）が七七歳、乃木が五六歳、禾原（嘉永五年生）が五三歳、漱石（慶応三年生）が三八歳、荷風（明治一二年生）が二六歳である。

しかしながら、ここで確認しておかなければならないのは、この五〇年の間に、漢詩というジャンルが直線的に衰退したわけではなくという点である。むしろ事実とは逆であった。例えば荷風の家系においては、確かに、毅堂や縁戚に当たる大沼枕山の世代から、禾原や三橋（阪本越郎および高見順の父）の世代へかけて、漢詩人とし

ての著名度と影響力が小さくなったことは明らかであり、荷風に到っては、デビュー期を除き、漢詩を発表したことはほとんどないが、その毅堂や枕山を描いた『下谷叢話』（大正一三年一月～七月、『女性』初題「下谷のはなし」という考証の営為や、父禾原の漢詩文集『来青閣集』一〇卷（大正二年二月）を編んで配り本としたことなどに代表されるように、実際の詩作の多寡とは別に、関心についてはかえって高かったものとも考えられるのである。

『明治文学全集』第六二卷『明治漢詩文集』（昭和五八年八月、筑摩書房）の神田喜一郎の「編集後記」には、次のような言葉が見える。

　　いったい明治の漢詩は、(略) 日本に漢詩あつて以来、空前の発達を遂げたものである。殊に後半期、細かにいうと、明治二十年から三十七、八年に至るまでの間であるが、その間が著しかった。(略) 明治の新しい気運に呼应して、新しい詩壇の開拓に努力したのは森春濤で、その活動には目覚しいものがあった。(略)

　　明治後半期の漢詩壇には、(略) 一は数えきれない程の優れた作家が綺羅星のごとくに並び出たのであった。そうしてその上には、明治の元勳副島蒼海が君臨していたのである。

　　この副島蒼海の役割に典型的なように、漢詩は、古来、政治と文

学とが近接していた日本の文学伝統において、おそらく最後の生きたジャンルであった。しかも神田は、明治後半期が、日本に漢詩あつて以来一番の隆盛の時代であつたとまで述べているのである。漢詩というジャンルと文化は、明治という時代のなかで、独特の軌跡を描いたのである。

　　あらゆる時代が、戦争によつて文化的な区切りをつけるように、明治もまた、日露戦争によつて、政治と文学とが出会う一つのジャンルを変質させた。その象徴的存在が、明治天皇の靈輦の御発引の合図とともに死に赴いた乃木希典という漢詩人であつたといえよう。日露戦争を経て明治という時代が終わり、乃木が殉死するという時代の動きに照らして見るならば、漢詩というジャンルの文学史上における役割は、あたかも乃木が明治という時代において果たした役割と重なつて見えてくるのである。明治の隆盛と悲劇の絶頂は日露戦争であり、それは最後の光を放つた明治後半期の漢詩の姿と見事に重なり合うものと考えられるのである。

二、乃木をめぐる言説

　　周知のとおり、乃木が殉死した時、これをめぐつて多くの言説が生み出された。將軍の死という事件そのものへの興味に加え、それが、明治という時代も半世紀近く過ぎた時点で、殉死という、いわ

ば明治以前を想起させるような行為であったがために、よけいに大きな影響力をもったものと考えられる。しかし、このような事件性が、乃木の人物像を伝える際に、ある特殊のフィルターをかけることも容易に想像できる。

乃木をめぐる悲劇性の言説は、既に、日露戦争で二人の息子を亡くした際に、流布する用意が出来ていた。例えば森鷗外は、日露戦争従軍時の陣中での詩歌を集めた『うた日記』（明治四〇年九月、春陽堂）に収めた「乃木將軍」という詩の第三連において、次のように詠んでいる。

汝は誰そ　そを何処にか　負ひてゆく
聞召せ　背負ひまつるは　奴わが
主と頼む　乃木將軍の　愛児なり
年老いし　將軍の家の　二人子
そのひとり　勝典ぬしは　いちはやく
南山に　討たれ給ひて　残れるは
おとうとの　保典のぬし　ひとりのみ
背負へるは　その一人子の　亡骸ぞ

このような悲劇に接した乃木自身の様子については、しかしながら、感情を露わにしないと描写するものが多いようである。例えばこの詩においても、「將軍の　睫毛だに　動かざりきと　語りけり」

「日露戦争と近代の記憶」

と結ばれている。ここには、悲劇の中心にいる乃木が、周りとの対比から、何も語らないことでよけいにその悲劇性を強く身にまとう仕組みが見て取れる。

事が身内に関わる悲劇であればあるほど、將軍という公的存在である乃木自身は、その私的な感情を押し殺し、沈黙せざるを得なかった。そしてその沈黙が忍耐の態度へと翻訳されて伝わり、乃木をめぐる言説は、説明を要せずという形で神話化されていくのである。もちろん、言説の特別化にはその他の要素も多々関わった。例えば三宅雪嶺は、乃木の清廉なる性格を次のように称揚している（『想痕』、大正四年七月、至誠堂）。

陸軍大將学習院長たりして、知識才能の人を超ゆるを以てに非ず。老軍人として比較的知識才能あれど、之に匹敵し、尚ほ之を凌駕するは、世に少からず。而して乃木以前に乃木なく、乃木以後に乃木なく、明治時代を飾るべき第一品に算へらるゝは、榮達に心を煩はさず、信ずる所に殉ぜしが為めなり。明治年間人多きも、赤心より国体を重んじ、忠君愛国の精神に富み、私的の利害を超越せるは、之を前にして西郷大將、之を後にして乃木大將を推す。（略）人あり、琵琶を手にして城山を歌ひ、乃木大將を歌ふや、聴く者感激し、或は落涙して已まず。是れ必ずしも將軍の啞弁にして琵琶歌の面白きが故ならず、富貴を

断念し、一意君国に竭くすの至誠に動かさるゝに出づ。国体を明徴にし益々忠君愛国の精神を堅実にするに意あらば、先づ自ら利達の爲めにせざるを証明すべし。

また徳富蘇峰は、乃木大将の勧めにしたがつて、旧著『吉田松陰』（明治二六年二月、民友社）の改訂（「事実」に於ては、新築にも過ぎたる大修繕）を行つたと、次のように述べている（改訂版「例言」、明治四一年九月二四日の日付）。

偶々本年五月乃木大将の剴切なる従憑を受け、猛然として斯事に従ふ。（略）若し乃木大将の一言微りせば、予は今日に於ても、其志を果し得たるや否を知らず。

これらはいずれも、間接的に乃木の人格を示す言説である。さらには、理由は明記されないが、乃木より先に逝つた石川啄木もまた、「予の畏敬措く能はざる真骨頂漢乃木將軍」（『林中書』、明治三九年一月―二月、盛岡中学校『校友会雑誌』）と書いて憚らないのである。蘇峰と啄木の言は、殉死を待たずに既に乃木のいわば神格化の素地が出来上がつていたことを示している。

しかもそれは、大衆にも流布しやすい、わかりやすい神格化であった。たとえば神園黙郎編『純薩摩琵琶歌』（大正二年一〇月、矢島誠進堂、第五版）には、「増補」として、「明治天皇」と「乃木將軍」の二曲が加えられている。「乃木將軍」は河内秋月作で、二段

にわたる。初段は主に日露を語り、第二段は殉死を語る構成となっている。そして初段には「凱歌」の漢詩が挿入され、第二段には夫妻の辞世の和歌が取り入れられているのである。漢詩は日露戦時を要約し、乃木を代表するのである。

またこのような乃木への特別な視線は日本人に限つた話でもなかつた。日露戦争時、アメリカ合衆国の従軍記者であり、乃木軍の司令部に従属して乃木と親しく接したスタンレー・ウォシユバンには、『乃木』（目黒真澄訳、大正一三年四月、文興院^①）という一冊の伝記まである。そこには、次のような言が見える。

如何なる国家的榮譽も、個人的私望も、祖先の樹立した古の武士道を服膺する、其の鉄石の精神を動揺さすことは出来なかつた。日本古来の理想主義は、深く將軍の胸底に燃えて、絶えて焔の細ることがなかつた。（略）日本帝国よりすれば、国民的理想の復興であり、諸外国よりすればまた、個人的生活の上衣をかなぐり捨て、全生命を捧げて、世のため国のために奉公の義を全うせんと志し、其の志を達すれば欣然として死に就くことの出来る人物の、現今の世にもなお存在する所以を悟るべき、一大刺戟となるのである。

要するに、乃木の名声にとつて、殉死はいわば最後の確認であり、または念押しであつたのである。

もちろんこのような言説とは別に、乃木を否定する言葉も存在した。これについて、内田魯庵の「気まぐれ日記」（明治四五・大正元年七月―十二月、「太陽」、後半三回は「氣紛れ日記」）の「九月十五日」の乃木殉死の際の記事には、次のように書かれている。

此日は何の新聞も初めから終りまで乃木將軍の記事を満載してをる。（略）其中で將軍の心事は諒とするが其手段は感服出来ぬと難じたのが某々の二新聞で、將軍の心事が了解出来ぬとか、原因が解らぬから批評が出来ぬとか言つた人が三四人あつた。世の中が一番利口な奴が一番人間らしく無い奴だと杜翁が言つたのは之だ。日本の歴史に養はれて聊かなりとも乃木將軍の人と為りを知つてるものならコンナ利口振つた事は言はれぬ筈である。

ここで魯庵が強く非難した記事の類の一つと思われるのが、次のものである。同じ九月一日に『時事新報』に掲載された、石河幹明の「乃木大將の自殺」という文章である。

我輩は（略）大將の死に就き批評を試みるは私情に於て忍びざる所なりと雖も世間或は理と情とを混同し乃木將軍は流石に忠臣なり先帝に殉死して其終りを全うしたりなぞ其死を称賛するものあらんか大なる心得違ひと云はざるを得ず（略）自殺その事の背理の非行なるは云ふまでもなければ旧思想家の説

を認め自殺は止むを得ざるの場合ありとし乃木大將の生涯に於て若しも自殺の場合ありとせば日露戦役後凱旋の時に在りしならん（略）役終りて凱旋の暁に作戦その当を得ず陛下の軍隊に損害を及ぼし国民の子弟を殺したるは上下に対し相済まざる次第なりとて責を引いて自殺したりとせんか其事の是非は論外とし忠誠一偏の点より云へば寧ろ其死所を得たりしものならん（略）大將の如き地位に在りながら此辺に思慮を及ぼさず単に平素の奮遇に感じたるの余り感情一偏よりして自から其身を殺したるは恐らくは先帝の御遺志に副ひ兼て新帝に対し奉る所以の道に非ず（略）感情一偏の爲めに臣子奉公の正道を軽んずるものにして事の本来軽重を顛倒する之より甚だしきはなし我輩の断じて与せざる所なり

この議論の是非は今は敢えて問わないことにしよう。問題は、乃木をめぐる言説の特徴が、このような双方の評価を共に生み出す力と関係が深い点である。西南戦争において軍旗を敵軍に奪われ、その失態を負い目として持ち続けたことが、かえって乃木の魅力の大きな要因となっていることは間違いないのである。

言説において、空前絶後の存在の譬喩を試みるには、通常の讃え方では到底足りない。誉めるだけでは不十分なのである。その際にかえって悲劇と欠点とが、その美德に光彩を添えるという、実に皮

肉な効用が成立することがある。これが、日露戦争の大きな犠牲と勝利、また三国干渉へと繋がる日本という国自体がおかれていた当時の状況、それこそは、開国間もない後進国から形だけの一等国へと押し上げたこの戦争の意味と共に通ずる広義の両義性であった。田山花袋は、このことを次のように述べている（『東京の三十年』、大正六年六月、博文館）。

明治天皇の崩御も、乃木大将の死も、功業を樹つるといふことの悲劇であることを私はつくづく思つた。功業は人を滅さずには置かない。又、功業はある犠牲を要せずには置かない。

勝利者の悲哀、勇者の寂寞、さういふことがひし／＼と思ひ浮んで来た。

この見方は確かにやや穿つた見方ともいえよう。しかし、このよくな両義的の複眼的な視線を、日常における現実認識との区別という意味合いにおいて、すなわち非現実的という意味で、仮に文学的と呼ぶなら、この両義性への殊更なる着目こそは、とりもなおさず文学性の一つの表れと認定できるのである。

三、乃木希典の漢詩

乃木自身の漢詩について、例えば前掲の内田魯庵「気まぐれ日記」の「自九月十七日九月中」の項には、次のように書かれている。

將軍の一生の逸事中には後世の画題とし詩題とすべきものは沢山ある。金州城外の『征馬不_レ前人不_レ語、金州城外立_レ斜陽』の如き落寞たる古戦場に数騎を従へて低徊去る能はざる画面が髣髴として現はれてをる。

これは先に触れた「乃木三絶」のうち「金州城作」の後半部である。

さらに、同日記の「十月十日」の項には、「將軍の著名なる『愧我何顔看父老、凱歌今日幾人還』の感慨は將軍が念念不忘る、能はざる処、少くも將軍の死を決したる有力なる遠因の一たるも亦争はれない。」と書かれている。これもまた「乃木三絶」の一、「凱歌」の後半部である。この乃木の感慨などは、何と直接的であろう。あらゆる文学ジャンルのなかでも、形式上の制約の多い漢詩という分野にあって、あるいは、形式的であるが故にこそ、そこに盛り込まれた心情はかえつて自由に羽ばたかせることが出来たのかも知れない。

前掲のウォッシュバンの『乃木』に、「詩歌論」という節がある。そこに、次のような興味深い文章が見られる。日露戦争に従軍した際、同じく「コリヤズ週刊新聞記者」であった、「リチャド・バリー」という記者仲間とのエピソードについてである。

しかしバリー君は、(略) 乃木大将の眷遇を受けること特に

深かったが、遂に將軍をして其の迎合を恕せしむべき一点を見出した。何ぞ図らんそれは將軍の詩歌であつた。將軍は時々優雅な推敲に耽ることがあつた。(略) パリー君は聊か斯道に志すところあつて、晩夏の頃の小閑に將軍の筆を執ることがわかれると、直ちに山口通訳に取り入つて其の翻譯を求めた。やがて、乃木大將の勞作に係る日本の表象文字は、一種の英語に變じてパリー君の手に歸した。彼は大いに將軍の思情と、其の典雅な表現とに動かされて、これを適當な英語の韻律に訳出しよう、我を忘れて一週間も苦心を続けることがあつた。

ここに書かれる「詩歌」が和歌か漢詩かは不明であるが、戰場における作詩の態度としては共通するところであろう。さらにこの話題を語り合う際の乃木の格別なる様子について、ウォシユバンは次のようにも描写している。

他の手段によつて其の名譽心に訴えようとしても、將軍は毫しも動ずることがないが、作詩の讚評を聞く時のみは、小児のように夢中になつていた。パリー君が翻譯して、而も佳作となつたものを齎して、原詩の情調に適する韻律選択の苦心を語る時、恍惚として両眼を閉じて傾聴する將軍の面影が、髣髴として今なお眼前に浮んで来る。パリー君は將軍の著想を表すのに、シエークスピアの韻律が適するか、又はスウィンバンのが適する

か、それを決めるのが困難だと言つて説明した。彼は將軍の詩人的性格を讚美して止まぬ位だから、此の問題にはまた極めて真摯であつた。そして彼が將軍の作品を論評する時、將軍は始終ボンチ人形のように嬉しそうに見えた。ここには、詩歌に対しての乃木の、余技以上の関わりが見て取れよう。

中央乃木会編『乃木將軍詩歌集』(昭和五九年一月、日本工業新聞社)の「まえがき」には、「本書の編纂にあつて、現存する乃木將軍の詩歌については、集め得るものは悉く集めて見た。特に漢詩については、その殆んど全部を収録しその数は二百三十九篇に達した」と書かれている。

前述の「乃木三絶」は、以下のとおりである。なお、題名はいずれも仮のものである。

〔金州城作〕

山川草木転荒涼 十里風腥新戰場

征馬不_レ前人不_レ語 金州城外立_レ斜陽

〔爾靈山〕

爾靈山險豈難_レ攀 男子功名期_レ克艱

鉄血覆_レ山山形改 万人齊仰爾靈山

〔凱歌〕

皇師百万征^三強虜^一 野戦攻城屍作^レ山

愧我何顔看^二父老^一 凱歌今日幾人還

このうち「金州城作」は、長男勝典が戦死を遂げた南山にある、金州城にて読まれたものであり、「爾靈山」は有名な二百三高地のことで、ここでは次男の保典が亡くなっている。「凱歌」は、凱旋帰国に際しての詩である。三詩とも、乃木の生涯において、特筆すべき場面で作られたものであった。

事件はそれ自体で言説となりうる。その上で、それを漢詩という形式に盛り込んだ際、そこに別の次元の問題圏が成立する。それが、事件の再確認における文学性の役割という問題圏である。

これら三つの漢詩は、たとえ作られなくとも、三つの事件は別の媒体によって伝えられたであろう。事実、乃木の凱旋に当たっては、この詩よりおそらく、明治三十九年一月一日に凱旋し、参内して明治天皇に拝謁奏上した「復命書」の方が著名である。

しかしながら、例えば「金州城作」の「十里風腥新戰場」や「爾靈山」の「鉄血覆^レ山山形改」、「凱歌」の「野戦攻城屍作^レ山」の描写は、本来は漢詩独特の大袈裟な表現であり、厳密には描写とは言い難いが、その形式の特徴を超えて、むしろ壮絶な戦争の生々しさを伝えている。これは、前掲の『乃木將軍詩歌集』において明治三十七年八月の第一回旅順総攻撃をうたったものと推察されている次の

詩とも共通するところであろう。

「旅順口」

硝煙掩^二宇宙^一 砲声轟^二天地^一

血河千里漲 凄絶旅順口

また、先にも触れた「凱歌」の「愧我何顔看^二父老^一」「凱歌今日幾人還」は、多くの犠牲を出した事実を背景として初めて、悲劇を文学的な感動へと正に劇的に転換することができるのであろう。これらは、事実の再現の装置ではなく、やはりそこには、漢詩による新たな「事実」の創造が窺えるのである。

その「事実」こそは、戦争というものの一側面を切り取り、そこに読み手の視線を誘導し、本来的には普遍化できないはずの歴史の断片を、一つの全体像として提示するという、文学のもつ全体化とも呼ぶべき作用による、正しく虚構なのである。

四、漢詩というジャンルのイメージ

明治期における漢詩のイメージは、近代詩一般のそれとはおそらく全く別のものであった。それは、漢詩が作られ、受容される場を検証すれば明らかとなる。例えば乃木の日記からは、上級の軍人たちがごく自然に、漢詩を作り、交わっていた様子が窺える。

夙に明治二十六年一月二七日の項には、次のような記事が見える

(乃木神社社務所編『乃木希典全集』中、平成六年七月、国書刊行会)。

夜吉田庫三来り詩ヲ示ス

一月廿五日大雪聞歩兵第一連隊行軍近郊快然不自禁有此作

行伍整齊朝発宮 銀鞍白馬太鮮明

天翻柳絮羅蹊滑 人着鴉毛羽服輕

戈影陸離兼雪映 笳声嚙曉帶風鳴

為問深院暖炉底 紙上滔々坐說兵

また、明治三七年一月二四日の項にも、次のような記事が見える。

○夜山縣元帥ヨリ詩アリ(電報)

百彈激雷天為驚 合圍半歲万屍橫

精神所到堅於鉄 一舉遂屠旅順城

山縣有朋もまた、含雪と号して漢詩を作った。しかしながらこの山縣の詩にあるのは、前者のそれとは全くその相貌を異にしている。平時の優雅な詩のやりとりなどではない。「電報」とあるとおり、これは、山縣參謀総長から乃木司令官に宛てた、激励の暗号電報であり、またそれは、旅順攻撃の成否が日露戦争全体の鍵を握ることを告げたものでもあった。この例に代表されるように、漢詩はこれを文学一般に含めようとする視線から外れるような場面においても

作られた。つまり漢詩とは、時に非実用的な遊びとしての文学性を第一義としない、特殊なジャンルなのである。

しかしながらこれは、逆に云えば、わざわざ漢詩に仕立てなくともよい実用的な場面においても、漢詩は作られたということでもある。速さと正確さを求められる電文においては、このような面倒な形式はそもそも不要なはずである。ましてや、戦争の最前線においては、一歩誤れば不見識の謗りを受けかねない営為といつても過言ではあるまい。

むしろ漢詩は、他の文章形式のそぐわないそのような場においてこそ、積極的にそのジャンルの性格を主張するジャンルであったというべきかもしれない。その意味において、文学と非文学的状况との同居を許容する漢詩というジャンルは、このような場の連続体であった明治という時代を代表するものともいえよう。

あるいはこれを、乃木とステッセル將軍の会見に準えてもよい。「水師營の会見」と称されて、後に作詞佐佐木信綱、作曲岡野貞一による文部省唱歌にもなったこの会見は、旅順の降軍の将であるステッセルに、乃木は帯刀を許し、紳士的な扱いをしたことで著名である。これまでの戦闘で既に乃木は二子を失い、日露戦争がこの後も激しい戦いを各地で繰り広げることを考え併せれば、その会見の特殊性はいっそう明らかである。

戦争途中に行われたこのような会見が人々に受容され、その後も歌などによって喧伝されたことも、日露戦争の特別性を示す。このような戦争という非人間的状況と紳士的で人間的な待遇との同居こそが、乃木の評価に集約されていくのである。

漢詩もまた、かつてはそのように、すなわち文学的鑑賞のみではなく、文学外へと開かれた受容を前提として作られたジャンルであった。その漢詩が文学という窮屈な枠組みでしか評価できなくなつた時、その存在意義はほぼ失われたと云つてよからう。乃木大将という人物の評価が分かれたのは、近代の必然であり、そこにもまた、受容する側の判断の狭隘化が想定できる。

乃木が漢詩人であつた事實は、乃木の評価と漢詩の受容との類比の点から云つても、実に象徴的と云わざるを得ないのである。

注

- ① S・ウォシユバン『乃木』の引用は、「明治文学全集」第四九巻『ベルツ モース モラエス ケーベル ウォシユバン集』（昭和四三年四月、筑摩書房）に拠つた。なお同書の「解題」に拠ると、「目黒真澄訳の創元社本（昭和一六・一一、初版。一七・二、再版）を底本とした。」とのことである。なお同「解題」に拠ると、『乃木』の原著は、一九一三年にロンドンとニューヨークで出版された *Notas* であるという。
- ② 乃木神社社務所編『乃木希典全集』下（平成六年一月、国書刊行会）には、これに次の詩を加え、「漢詩四題」として、乃木直筆を写真

版でこれを収めている。

〔神州〕

峻嶒富嶽聳千秋 赫灼朝暉照八洲

休説区々風物美 地靈人傑是神州